



適用及び使用方法

作物名	適用場所	使用目的	希釈 倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使 用 回 数	使用方法	ベンジルアミノプ リンを含む農業の 総 使 用 回 数
りんご (苗木)	－	側芽発生促進	50～ 100倍	5～10mℓ/苗木	新梢伸長時	10回 以内	新たに伸長した 新梢部に散布	10回以内 (立木全面散 布は1回以内)
りんご		高接1年枝 側芽発生促進		100～400ℓ/10a		伸長旺盛期 (6月上旬以降)	1回	立木全面散布
なし (栽培育成時の 非収穫年樹)		側芽発生促進	30倍	3mℓ/側芽	側芽発生時			発芽部位に 噴霧
ぶどう (デラウェア)	露地栽培園	無種子化処理の 第1回ジベレリン 処理時期の早期 への拡大	300倍	－	満開予定日の 14～17日前	1回	ジベレリン処理 の第1回処理 液に添加して蕾 (果房)を浸漬 処理する。	1回
ぶどう (マスカット・ベリ ーA、旅路(紅塩 谷)、パッファロー (アーリースチュ ーベン))	ハウス栽培の 花振り発生園	花振り防止			満開予定日の 11～14日前			
おとう (苗木)	ハウス等 施設栽培の 花振り発生園				新梢伸長時 (主幹延長枝の30 ～80cm伸長期)			
アスパラガス	－	萌芽促進	300～ 600倍	100～300ℓ/10a	夏秋どり、慣行最 終収穫予定日の 10～30日前(但 し、収穫前日まで)	6回 以内	茎葉散布	6回以内
きく		親株栽培におけ る側枝への腋芽 の着生促進	2000～ 4000倍		摘心時			
カーネーション		側芽発生促進	300倍	6mℓ/株	側芽発生前	2回 以内	花茎の先端部 に噴霧	2回 以内
こちょうらん		着蕾数増加	1000倍	0.5mℓ/花茎	発蕾時	5回 以内		5回 以内





⚠ 効果・薬害等の注意

- 調製した薬液は放置すると効果が低下するので、調製当日に使いきる。又、調製液は日陰におく。
- 他の農薬との混用はさける。(ジベレリンに添加し、ぶどうに使用する場合は除く)
- 蚕に対して影響があるので、周辺の桑葉にはかからないようにする。
- 本剤をぶどうに使用する場合には、次の注意を守る。
 - ①花振り防止に使用する場合は、常に花振りが発生する園のみに使用する。なお、ハウス初年度の木には使用しない。
 - ②無種子化処理の第1回ジベレリン処理液に混用して処理時期を拡大する場合、ジベレリン単用での処理適期より3～4日早く処理することができる。
 - ③所定の処理時期から遅れて処理すると着粒過多になったり、果粉の付着果房の着色が悪くなるおそれがあるので必ず適期に所定濃度で処理する。又、処理適期がすぎたものには、使用しない。
 - ④ジベレリン処理液に添加した際、よく攪拌して使用する。
 - ⑤上記注意のほか使用に当たっては、ジベレリンの使用上の注意を厳守して使用する。
- 本剤をりんごに使用する場合には、次の注意を守る。
 - ①新梢が十分ぬれる様に散布する。
 - ②摘芯を行うとより効果的である。
 - ③作用が出にくい品種、つがる、王林等では、所定濃度の高濃度で使用する。
 - ④新たに伸長した新梢部に散布して側芽発生促進を行う場合、品種、使用地域によって使用回数、効果、薬害が異なることがあるので、地域指導機関の指導を必ず受ける。
 - ⑤苗木に使用する場合は、食用には供さない。
- 本剤をなし(栽培育成時の非収穫年樹)に使用する場合は次の事項に注意する。
 - ①本剤は側芽の発生を促進させ早期成園化させる目的であるため、非収穫年の苗木植付後の育成時に使用する。
 - ②本剤処理後に結実した果実は、適切に廃棄処理し、食用に供しない。
- 本剤をアスパラガスに使用する場合には、若茎にかかると奇形を生じることがあるので茎葉下部への散布は控える。
- 本剤をさくに使用する場合には、無側枝性が強く発現する品種及び高温期の栽培では効果が劣る場合がある。
- 本剤をカーネーションに使用する場合には、次の注意を守る。
 - ①側芽の発生を促す節位を中心に散布する。
 - ②同一節位への本剤の連続散布は、側枝発生過多、黄変、草丈抑制等の薬害を生じることがあるのでさける。
 - ③高温時に散布すると、葉に黄変、褐変等の薬害を生じることがあるので、注意する。
 - ④品種、栽培条件によって、薬害を生じることがあるので、予め安全を確認の上使用する。
- 本剤をこちょうらんに使用する場合には、次の注意を守る。
 - ①第7花の発蕾以降に花茎の先端部に7～10日間隔で噴霧する。
 - ②増やしたい花数に応じて本剤の使用回数の範囲で使用回数を増やす。
 - ③本剤処理により花数が増えると、花の大きさがやや小さくなる傾向があるため注意する。
- 本剤をおうとう(苗木)に使用する場合には、次の注意を守る。
 - ①未結果樹で使用する。
 - ②葉に褐斑を生じることがあるが、その後の生育には影響ない。
 - ③食用に供さない。
- 本剤の使用に当たっては使用量、使用時期、使用方法を誤らないように注意し、特に初めて使用する場合には病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。





安全使用上の注意



- 本剤は眼に対して刺激性があるので眼に入らないよう注意する。眼に入った場合には直ちに水洗し、眼科医の手当を受ける。
- 使用の際は、農薬用マスク、不浸透性手袋、長ズボン・長袖の作業衣などを着用する。作業後は手足、顔などを石けんでよく洗い、うがいをするとともに洗眼する。

治 療 法…該当なし

魚毒性等…浸漬後の薬液は、河川等に流さず、水産動植物に影響を与えないよう適切に処理する。

保 管…密栓し、火気をさけ、食品と区別して、直射日光が当たらない冷涼な所。

